

心霊科学からみた「古事記」

「普遍的生命」の理解

昨今の日本人には、神の本質に対する認識の不足、そしてその潜在化が顕著になっているようだ。それは今日の物質万能唯物時代の結果が現れであることを、われわれ心霊学徒としては指摘しておきたい。

今や、近代物質万能時代も終末期に入っており、その断末魔が世相に現れているということができる。こうしたことに無関心な人々ばかりではなく、われわれを含め、神霊の実存と神界組織下に生命を全うしている人間としての存在であるという原理を改めて自覚することは大切で、そのためには正しい反省を以て真の人間観を理解し把握することがぜひとも必要なのである。

すなわち、人間は生きものであるということ。その人間には死というものはないのである。それは、われわれは霊魂によって生かされ、その霊魂は永遠に生き通しであるからである。同様に、宇宙も生きものである。実は、宇宙は生きものであると同時に、その支配下にある万物、人間も、万有すべてが生命をもって永久に生き通しているのである。

その生命を物質科学では「未知」としている。それに対して、その生命、万有すべてが生命をもっているという原理を明かしているのが、「古事記」というわけである。

しかしながら、今日の学者をはじめ一般の人々も、「古事記」に関する大きな曲解と誤解を以て扱っているため、上述のことが理解できないのである。「古事記」の表現に内在する正解と求める作業は、心霊科学的手法を抜きにしては解明が困難である。

“神話”の意味

わが国の古典の一つ「古事記」は、一般においては“神話”として理解され、これがおとぎ話にまで採用されている。それも正しい理解から生まれたものであれば賛成であるが……。

この“神話”というところから、神話学ともいえる“文化人類学”とか、“伝説学”とか、“考古学”として、歴史学者はこのような観点から取り上げている。もっとも、これを古典として取り扱っているのに“国文学”がある。それ以上に「古事記」に現れている神々を、わが国独特の国柄をいうことを重視して理解している“国学”というもの

もある。

最近では、歴史家により、国文学者により、作家によって長い間謎とされてきた邪馬台国問題との兼ね合いで、この「古事記」を注目する傾向もあるようである。それはともかく、一般人が理解している神話というのは、どんな意味が含まれているであろうか。手近にある辞典によると、「神話とは、歴史以前の伝説と物語をいうのである」と記載されている。有史以前の伝説と物語を指しているというが、その伝説とは、これまたどんな意味を持つものであろうか。

近代科学で「伝説」の由来はつかめぬ

「古事記」には一体どのような意義を有しているのでしょうか。そこで、まずこの伝説なるものの意味から考えてみよう。

まず、これを知るための学問としては、伝説学や文化人類学、考古学などの学術的研究が役立つと思うのは一般の人たちであろう。しかし、古代とか神代といわれているものが基礎としているのが神話・伝説であることから考えるに、これらの諸学は、いや今日の学問のすべては、現象の上に立つ、あくまでも五官による唯物科学であることから、その裏付けにしてもすべてが唯物的な観点に立たざるを得ないことになる。そこで古文書とか出土したものによる手がかりが必要になってくるわけである。この点を考慮すると、今日の学問や常識では「伝説」の由って来るところは到底判るはずもないのである。伝説の原点を判らずに、正しく解明できないのは当然のことであろう。

「こんな話がある」と、ある人から語られた話を、別の人が聴いた話！これが起点であり、伝承されて、それが「伝説」という言葉で表現されるとおり、ある時代から、何かによって、地上に遺っている。それが伝えられているのである。

まして、今日の学問・常識は“人間は生まれた時から死ぬ時まで”は生きていた、これが“その人の一生涯”であると、決めてかかっている。だから、死んでしまえば、その人の事績は、その人がやった（行動）ことはすべて判らないので、一般にはそのまま葬られてしまうことになる。ただ、その事績、行動が何らかの形で記録され、何かの方法で後世に残されている場合には、その範囲において判る。その残された何かの記録や古文書によって、しかもそれらのことが、確かな裏付けとなるものもあって、これは間違いないといった範囲内のことと、その前後に叙述する人の主観がはいって、客観的にまずこれで良からうと論理が集約され、系統だったところに歴史が生まれる。

その筋書きをする人を歴史家といっている。また、このようなことを“科学的に”と

か、“弁証論的に“とかいって、間違いはないということで発表され編纂されている。こうしたことによってではあるが、それに対して、その事績・行動、ある物語以上ではなく、いわば裏付けもなく、どうにもその史家の論理に合わないもの、しかし、それでも、口から耳にのこされている話、物語を名付けて“伝説”といているのである。

そこで、その伝説、そのものについての学問、そのものに近い学問（伝話学、神話学、文化人類学等々）があるにしても、それはその伝説そのものをいろいろの角度から扱った、単なる表面に現れたものを、それらにまつわる学究が言うところを体系づけたというまでのことである。

これが今日の科学の名による諸学である。しかしこれらはいうまでもなく物質科学、唯物論という範疇のもので、これで真理をつかむことができないが、それが今日の時代の思潮であるので、やむを得ない。そこで近代思想というものは物質時代の産物だというのである。ちょっと横道にそれてしまったが、要するに、今日の学問、常識では伝説の由って来るところは、皆目判らない。その点を、今日が物質時代にあって、学術には変わらない新興科学の心霊科学が、その解決法を教えてくれるのである。

この心霊科学は、自然科学とは異なった結論を体系づけている学問である。たとえば、人間は単に肉体のみで生きているのではない。肉体というが、それは物質という死物ではないか。それが生々として生活を続けている。生命があるというが、物質そのものである肉体のことではなく、肉体以外の何かが生命を与えて生きもの（生体）たらしめている。その生命を与えるもの、それが霊魂という超物質・エーテル体である。その“霊魂の宿”といえるもの、それを「幽体」と名付けているが、それと肉体と融合・加重して人間は構成されているのだという。これらの内面機構については、実験によって立証されているのである。

その霊魂が、ある地上的因果律によって、肉体から離れた時、それが「死」ということである。しかし、霊魂はエーテル体であり、脱離とともに他界をいわれる、ある霊界に、地上から引越して、そこに居住地を求め、向上の一途をたどりつつ永遠に亡びることはない、というところの「霊魂不滅」なのである。

この霊魂不滅を心霊科学は「人間・死後個性の存続」と表現している。人間は、決して死なないのである。死んでも死んでいない。生き通しているのである。これらに関する立証実例、しかもその実験は1848年にはじまって今日までの数限りなく発表されている研究結果からも明らかである。注目すべきは、それらの実験研究の手がけて来たのは世界的学者（大多数の学者は唯物論者であった）であり、それらの積み重ねによって心霊科学の体系が成立したのである。

今ひとつ重大なことは、死んでしまったと思っている過去の人々は、前述のように、一人の例外もなく現在、どこかの霊界の階層の世界に居住し、地上時代からの生活を継続しているだけではなく、彼らと通信（交霊）することができるが、それらの交霊通信については、4つの方法が講ぜられているのである。

ここで、表題の「古事記」の編著者も、それに関連ある人々も、それが古代人であっても、今もいずれかの霊界に生活しているのである。そして現在では修行を積み重ね、古代人ともいえぬ新知識の持ち主・文化人となっているのであり、その人たちとも通信できることは、前述の通りである。

伝説の由来

われわれ人間には、「心」と「体」と「精神」の三要素によって個人の働きをしている。これらの三要素は平常の場合は相互の協調によって生活を営んでいる。

ここで問題にしている伝説の由って来るところは、上述の4つの通信方法によって知ることができるのである。この方法について要約して紹介したい。

- ① その個人が精神統一の状態におかれると、心の意識の全部、もしくは、その大部分が蕩尽して、ただ精神のみが働くことになる。言い換えれば、意識することなしに、無意識下で、視、聴き、物を言うのである。この状態下で語られたものを、一般では、ことに靈感時代では、広い意味でいわゆる「神の言葉」となり、それが語り伝えられると、これが伝説となる。そして、その通信の受け手である個人の精神（守護霊）が優れていればいるほど、守護霊をはじめ高級霊とのつながりができ、その伝説はより優れたものとなる。これが伝説由来の1つである。
- ② 前述の守護霊（個人の精神、心とは異なる）は本人と何らかの因縁がある（たとえば家系・祖先の上で）としても、古い靈魂であるとしても浄化されたもの（例外もないではないが）であるだけ、他の優れた神格的存在と交渉してその結果を伝えることができる。このことは今日でも実際に行われている。（ではあるが、このことについての誤解もあるので、正しい心靈学によって正しい理解が必要であろう）これが伝説第2の由来である。
- ③ つぎは、高級霊（いわゆる神様）が直接、適当な交霊者（霊媒）を通じて、あるいは、その霊能者の守護霊を通じて行われる。しかし、これには、その霊能

者（霊媒）の素質・能力・神様の地位（すなわち、高級霊の中の上下関係）等々を厳重に審査の必要があり、不純分子の混入を防止しなければならない。難事ではあるが必ず守らなければならない鉄則である。この任にあたる存在が、わが国では審神者（さにわ）である。この審神者を抜きにして伝えられた神示・霊示なるものにはイカサマものがあることに留意が肝要である。今日世上には、ことに宗教信仰界には、臆面もなくこの作業を無視して、自分に都合がよいように、世間の人々を信じさせ、迷わせるものが多い。残念ながら、これが怪しまれない、あるいは怪しもうとしないのが現状である。ことに昔日のごとく語り伝えを復唱するという労などもなく、たとえば、自動書記などの自由に文字化させる現象下で、その弊が、弊とも思われず、聞く人、見る人を信じさせている。この方法が第3として数えることができる。

- ④ 霊能者（霊媒）の発声器官を使用せず（霊言現象ではなく）直接、空中から死者が生存の時に音声によって行う談話で、ある語り伝えを行う。この方法が第4である。しかし、この方法によっても、その内容や真偽についての判定は、直接談話者の優劣にかかっているのである。

（以上4つの方式の詳細については心霊科学の成書を参考にしてもらいたい。）

要するに、ここで取り上げている伝説の由来については、大体以上の4方式によってもたらされている。「古事記」の伝説は、その何れかによるものか明らかではないが、それぞれが混用されたことと思われる。

とにかく、今日の唯物主義の人々によって言われる神話とか、幼稚なおとぎ話などの作り話ではない。その点は心霊科学の上立って審神するとき、大部分は優れた神格を具えられた高級霊からの放送とみることができよう。

とはいえ、伝説には多少とも、その真偽等についての取捨は行われている。この「古事記」が献上せられた和銅5年（元明天皇の第5年）に太朝臣安萬侶が記述している序文の中の以下の件を最後に紹介しておきたい。

『是に天皇詔りしてたまはく、朕聞く、諸家のもたる所の帝記、及本辞、既に正実に違い、多く虚偽を加うと。今の時に当りて、其の失を改めずば、未だ幾年を経ずして、其の旨滅びむと欲す。斯れ乃ち邦家の経緯、王家の鴻基焉。故惟帝記を撰録し、旧辞を討覈して、偽を削り、実を定め、後葉に流へむと欲すとのたまう。時に舍人あり、姓は稗田、名は阿礼、年是れ二十八人と為り聡明にして、目に渡れば口に誦め、耳に払るれば心に勒す。即ち阿礼に勅語して、帝皇の日継、及先代の旧辞を誦め習はしむ。……焉

に旧辞の誤り懺へるを惜み、先紀の謬り錯れるを正さむとして、和銅4年9月18日を以て、臣安萬侶に詔して、以て献上せしむる者なり…….』